

もう一つの海

—石原吉郎作品論—

中 島 賢 介

はじめに

書く

詩 それは

海からこぼれて

空になるように

空からこぼれて

海になるように

そのように書かなければ

いけないものなのです¹

キリスト教詩人石原吉郎（1915～1977）は、終戦後8年間にも及ぶロシア（旧ソビエト連邦）のシベリアで抑留されるという過酷な体験を通して、帰国後同人誌投稿詩に作品をつぎつぎと発表し、昭和39年にはその功績からH氏賞を受賞した。その後も詩作のみならず、自分の体験をエッセイとして綴りつづけ、エッセイ集『望郷と海』で歷程賞を受賞した。今回はエッセイ「二つの海」を中心に、彼の「海」への思いが彼の詩文の中でどのように描かれているかを考察していこうと思う。これらのエッセイ集のタイトルは、「海」という言葉が必ず使用されていることから、彼が「海」に込めた思いは一方ならぬものがあつたという推測ができるからだ。

エッセイ「二つの海」は、1975年（昭和50年）発表されたものである。彼は小柳玲子・大西和男両氏が作成した年譜によれば、その年「五月と七月にわけて日本基督教団出版局編集局によるインタビューを受け」ている。この時には、仕事量と酒量とが比例して増えて、彼自身の体は疲労困憊の状態にあつた。

数年前より続いた抑留体験に関するエッセーは詩人の散文による仕事の中心になるものであるが、同時にこの仕事は極度の神経の緊張を強いるものであつた。執筆中幾度も精神的不安に襲われ、飲酒量の増す原因にもなつた。生来弱者に対して優しい人であつたが、この頃から病弱の人への同情がやや極端に帯びるようになる。²

中 島 賢 介

石原自身も、詩は帰国後すぐに書き出すことができたが、散文を書くには15年もの準備期間が必要であったと述懐している。彼にとって、詩とは「混乱を混乱のままに受け止めることのできる唯一の表現手段であった」³ が、一方散文は「外的な〈体験〉を内的に問い直し、それから問い直す主体とも言えるものを確立するための、言わば試行錯誤の繰り返し」⁴ であった。彼は公人として、歴史の証人としてその証言台に立つために、彼は自分の立場や主張を整理するために、それほどの辛苦を味わなければならなかった。

だがここで言えることは、彼が2つのジャンルの違いを認めているとうことは、詩作品として創出された「海」とエッセイの分類による「海」とは同じものである必要がないことである。更に、詩作品からエッセイへと表現し直されていく過程で、欠落した「海」が存在するという可能性は充分にあるといえるのである。⁵ 事実、詩の中には「これは明らかに2つの海の分類だけでは不十分である」という指摘ができるものがある。このことに着目し、「詩作品としては描かれているが、散文では表現できない、あるいは表現しようとしなかった『海』というものが存在する」という仮説を立てて詩作品とエッセイを読み比べながら証明していこうと思う。

1 北にある海「北極海」

序章でも述べたように、極度の緊張からアルコール中毒にまでなって書かれたエッセイである「二つの海」は、抑留・強制労働という過酷な体験で得た発想にもとづいて綴られている。彼のいう「二つの海」とは、「北の海」と「南の海」のことを指している。その中でまず、「北にある海」についての箇所を引用すると次のようなものがある。

北にある海というのは、私にとっては幻想の海です。ただシベリアの環境にいた時に、日本の位置が南ですから、当然南の海に魅かれるのですが、北に対する幻想があったということは、私自身にとって不思議でした。日本に帰ってきましたら南への志向というものは全くなくなってしまいました。それで、北への志向と言いますか、北へ遡ろうとする姿勢が強くなりました。「二つの海」⁶

北には何も無いわけですから、現在自分の目の前の河が北へ流れていくということで、その河を北へ向けて見送っているうちに、一種の寂寥感で自分を割合救っていた時期があるわけです。

「二つの海」⁷

「二つの海」と同じ内容を書き下ろしたエッセイ「海への思想」では、上記の引用に相当する部分は次のように記されている。

北へ想いがいた海とは、南への断念が反射的に求めた、いわば幻想の海であったとあっていい。南への希求の代替として北への指向があったということは、私には不思議という以上に重大である。

「海への思想」⁸

もう一つの海

そのような位置で、ゆるやかに流れる河のおもてにひたすら目を奪われるとき、南の方位をふりむくことはむしろ疼きであり、北をのぞむことは安堵の彷徨に近いものであった。そして密林の息をのむような静寂のままに、私をささやかなひとつの点景として、その全体を掩っていた、あるゆるやかな傾きのようなもの、それを私なりに寂寥とよぶことができる。 「海への思想」⁹

強制収容所とは、文字通り「戦争犯罪」という名のもと、実はソビエト国家を建て直すための労働資源の確保を目的とした施設であるが、ここでの生活は凄惨を極めるものであった。慢性的な疲労からくる寂寥感は、特に重労働の休憩時間の次に来ると石原は回顧している。その寂寥感は、彼が言うには安堵でもあり、密林の外には何もない北を思慕することによって自分の想像力を高める働きをしていた。

中でも「北にある海」には更に具体的なイメージが込められている。海だけではなく、そこに流れる「河」がある。河は海に注ぎ込まれるとその役目を終えるが、強制労働の最中にある石原は、河と自分を重ね合わせていた。エッセイ「海を流れる河」には、役目を果たした河と、終焉に至る自分とがオーバーラップし、「本能的に回避した」という記述もある。¹⁰ その河の先にある海を想像することは、自分の未来を描くということでもある。この収容所にいる限り、この想像に救われる。こうした安堵感が、当時の彼の拠り所であった。

帰国後、彼は国会議事堂前庭の日本水準原点標の文字が北を向いて書かれていることに非常に感動する。この感動は、純粋に自分の想像力の原点に立ち返ることができた喜びであった。それは、生の感覚を取り戻すことができたことに他ならない。

これらを総じて考えると、「北にある海」とは、石原を創作に駆り立てる根源であり、寂寥からくる安堵の場でもある想像上の海であることが分かる。

2 南にある海

南にある海とは、通過してきた海、日本海のことを指す。帰国が赦されたのは、彼が大陸に渡ってから、10年もの歳月が経過した後である。しかもその10年とは、諜報部員としての軍隊生活、敗残兵として移動を余儀なくされた生活、そして強制連行され戦犯として収容される生活と彼にとって激動の歳月であった。その生活から一変し、故郷の地を踏みしめる喜びは何物にも代えがたかったに違いない。だが、その一方で、日本には期待を裏切る現実が待ち受けていた。

日本海は、不安の海でした。不安があるということは、その先に大きすぎる期待があったからだと思います。その期待自体が幻想であり、ありえないわけですから、すべてが計算違いでした。これでおしまいだと思いました。ですから船に乗った時、がっかりしました。あれほどの、思慕に近い海への感情が、船が海に出た途端に、本当の嘘のようでした。それに海を見ることがとても空虚でした。

(中略) 私たちが、海に先にある日本という国を考えた時は、むしろ美しい風景に近いものとして考えていました。つまり、生活の場としての日本を考える力が、ほとんどなくなっていたということです。

「二つの海」¹¹

中 島 賢 介

つまり、彼ら収容されていた人々にとって、あまりにも違いすぎる環境に戻されることは、そのギャップに苦しむことと等しかったのである。それもそのはず、密林地帯では、捕虜以外の人々はほとんど存在しなかった。雄大な自然から人間同士がひしめき合う日本での生活にすぐには適応できるはずがない。また、何時帰ることができるか分からない状況の中で、日本の故郷としてのイメージだけを持ちつづけることと、日本での「生活」を想起することとは、かなりの隔りがあったに違いない。もはや日本はノスタルジックな対象でしかなかったのであろう。ということは、南にある海というのは、淡い郷愁としての日本と現実の捕虜としての生活を隔てていた海であるということができる。

3 故郷伊豆との訣別

彼は帰国後、戸惑いながらも弟の家に一旦身を寄せる。そして、彼の生れ故郷である伊豆とそこに住む親戚に会いに行く。そこでは、手放しで喜び迎えてもらえるであろうという期待があり、それが彼の唯一の希望でもあった。だが、ものの見事にその希望も断たれてしまう結果となる。彼を迎える者などどこにもいなかったのである。もはや伊豆の西海岸にたどり着いたのは、召集令状が来て国民全体から希望を託されて戦地に赴いた軍人の凱旋帰国ではなく、敗戦後の日本の現状が全く理解できない浦島太郎に過ぎなかったのだ。それどころか、彼は集落全体からソ連国家に洗脳された共産主義者ではないかという猜疑の眼に晒されるのである。

数あるシベリア抑留についての書物で、若槻泰雄著『シベリア捕虜収容所』¹²は、その全容を可能な限り客観的に検証しながらまとめられたものとして評価できる。その中で、抑留を体験した元軍人・軍属・民間人の一部が、帰国して理想の共産主義国家を築こうとしていたという事実がある。彼らは熱狂的な共産主義者で、特に昭和23年以降の引揚者の一部に見られ、中には帰国後もそのまま主義主張を貫く者もいた。このような現状がマスメディアで報道されると、人々特に地方の人々にとっては一つの脅威となっていたことが分かる。

現に、石原が故郷に親族に帰国の報告をしたい一心で訪れた伊豆ではこんな事件があった。石原が報告をしようとする前に、親族の一人が次の三箇条を提案する。

- 1 私（石原）が「赤」でないことをまずはっきりさせて欲しい。もし、「赤」である場合はこの先おつきあいをするわけには行かない。
- 2 現在父も母もない私（石原）のために「親代り」になってもよい。ただし物質的な親代りにはできない。「精神的な」親代りにはなる。
- 3 祖先の供養を当然しなければいけない。¹³

心身ともに疲労しきった上に突きつけられたこの条文は、彼の心に深い傷を負わせた。この帰郷以降、彼は地元への招聘にも頑なに心を閉ざしている。親族にしてみれば、自分と主義主張の異なるかもしれないソ連からの帰国者石原を受け入れることに躊躇うのは当然である。それも偏に、報

道から来るある種の恐怖感を煽られていたことが予想させるからである。しかし、こうした親族が抱く警戒心のことなど露知らず、ただ受け入れてもらいたいという純粋な気持ちで帰郷した石原は、この事件を契機に故郷と訣別するのである。この内容は、「肉親にあてた手紙」という文章の中で詳しく述べられているが、この文章こそ、故郷や親戚との絶縁状であったということが出来る。彼は、この文章の中で、3つの立場から自らの主張を展開している。1つはキリスト教徒としての自分、2つは宗教と切り離して一個の人間としての自分、そして最後は戦犯としての自分という立場があることを明確にしている。それゆえ、彼に関する先行研究も、どの立場を採用して述べているかということが明確に分類できるようになっている。

キリスト教徒としての立場からは、同じキリスト教詩人の安西均や佐古純一郎らによる作品分析である。日本キリスト教詩研究というのは、現在はまだジャンルこそ明確ではないが、キリスト教の主義主張を理解している人口の多さに比べ、キリスト教を信仰する人口が異常に少ないという点から世界の中の日本文学を理解する上で、充分一分野を形成する可能性を秘めている。また、日本文学の特殊性を裏づけるためにも研究されなければならないものでもある。

次に、最後の戦犯としての立場は、戦争の生き証人の一人として、自分の証言が歴史的にも価値がある、自分がそれを述べるためには重い責任を伴うという自覚が彼にはあった。現に、彼はこのエッセイ「二つの海」のもとになるインタビューを受けた時には、かなりの心身の疲労が著しく、それを飲酒によって紛らわせる日々を送っていた。それほど、戦争を正しく伝えようとする思いが強かったのである。先行研究では、その作品としての価値を貴重なドキュメントとして捉えようとするものが圧倒的に多い。信仰の世界まで踏み込んで理解しようとしていない点が、作品解釈を妨げているという批判を逃れることができない。

最後に、2つめの「人間としての石原」であるが、これは人間として根源から問い直すことで、むしろ日本人としての慣習から訣別しようとする彼の主張が一番如実に表現されているといえる。

私は、人間はどんな場合にも、人間としてのみかかわりあうべきだと考えます。そのばあい私たちは結びつける真実の紐帯となるものは、その相互間の安易な直接的な理解ではなく、それぞれの深い孤独をおたがいに尊重しあうことであると考えます。そのような場合にのみ、私たちは人間として全く切りはなされた状態でありながら、しかもその全体の上に深い連帯が存在しうると考えることができます。いずれにしてもそのような連帯は墳墓と儀式、慣習と血族意識とを核として成立する連帯とは全く別のものでなくてはなりません。 「肉親にあてた手紙」¹⁴

体で感じとったものはなかなか思想にはなりません。一種の抽象化の過程を経て、自分が別に感じたものを思想に変えていくわけでしょうが、その手続きが私の場合非常に難しく特殊なのです。私はその手続きとして、直感的に散文ではなくて、詩を選んだわけです。 「二つの海」¹⁵

故郷の人々から白眼視された石原の胸中には、馴れ合いによる血族意識が堪えられなかったので

中 島 賢 介

ある。彼は故郷とそこに暮す人々に絶望し、孤独を一層募らせることになる。しかし、皮肉なことだが、こうした訣別という悲劇があったからこそ、彼は産出する詩作品の価値を高めることができたという見方もできる。彼は自分自身を掘り下げる手段として、文章にはならない切れ切れの言葉を混沌の中から拾い上げるようになる。彼の詩人としての出発である。やるせない思いは、後述するが、詩作品からも散見することができる。彼から湧出する一つ一つの断片が詩となり、それを集めるとそれが詩集となった。こうした観点から見ると、この訣別なくして、彼は詩作品を芸術的価値の極みへと昇華させることができなかつたということが出来る。

4 北にある海を描いた作品

河

そこが河口／そこが河の終り／そこからが海となる／そのひとところを／たしかめてから／河はあふれて／それをこえた／のりこえて さらに／ゆたかな河床を生んだ／海へはついに／まぎれえない／ふたすじの意志で／岸をかぎり／海よりもさらにとおく／海よりもさらにゆるやかに／河は／海を流れつづけた¹⁶

この作品は、先述したように、河から海へ、そして海を貫いて流れつづける河といった海と河とが連続性を保ちながら尚且つそれを乗り越えようとする詩人の姿勢が現れている。ここに、北にある海を見ることが出来るのは、超越すべきものあるいは乗り越える対象としての「海」である。そこには確かに詩人の強い決意や希求が感じられる。

海をわたる

愛することは／海をわたることだ／空を南へかたむけて／水尾の行く手へ／たわんだまま／はるかなものと／なつてわたることだ／ひとはかがやくして／ゆえに告げおわる／香料の未明へ／翻る蹄鉄を／墓はひそかに埋めもどし／荒涼のまえの／さいごのやさしさとなつて／愛することは／海をわたることだ¹⁷

ちがう

どのような海を／わたつたにせよ／わたつたものは／海とはちがう／海とはちがうわたつた／ものへと託されたものは／海とはさらに／ちがうものだ¹⁸

これらの作品にも、前作同様に、海は超越すべき対象となっている。ここで海を用いて主張したいことは一貫しているという点が特徴として挙げられる。海を「わたる」という行為自体が、「河」もしくは「自分」と「海」との連続なしには成立しない。そしてそこは常に自分とは違った存在であり、詩人としてはその彼方に行く必要性と必然性があるのだということを主張している。

5 南にある海

ゆうやけぐるみのうた（抄）

おれ 木の舟にのった／あいつどろの舟にのった／ゆでだこのような夕日と／あいつ いっしよに／海にかくれた／おれ ばかをいっぴき／ゆうやけの海へしずめてきた／なぎさで おれ／なみだながしたとも／ああ ああ／あいつ なんにも知らね／なんにも知らね／ゆうやけぐるみ／海へしずんだ¹⁹

石原は、シベリアの抑留者同士が、日本から遠ざかる人は、日本に近づく人に自分の名前だけを伝えるといった習慣を体験する。自分が生きてきた証しは、詰まるところ自分の姓名だけであるという事実を実感する。自分の姓名が、他の人を通じて伝えられることで、たとえ道半ばで自分が死のうとも自分の生きてきた証しを他人に伝えることができる。自分の肉体は朽ち果てても、その人の姓名だけは伝えられつづけるのである。

たとえば、人がおのれの姓名を壁に書きのこすとき、彼は自己の肉体の存続を断念することによって、姓名そのものの明確さをえらぶわけです。そしてその瞬間から、彼と姓名との関係は転倒し、分裂するわけです。私たちはこんどの戦争で、人間の姓名が、断念を媒介にして、このように分裂する場面を無数に見て来たはずであります。戦場とは、人が進んで姓名を断念することによって、全く無名の存在となる場所ではないのか。もしそうであれば、断念するのはむしろ姓名の側からではないだろうか。

「詩と信仰と断念と」²⁰

彼は、更に自分が出征前に洗礼を受けたという事実も、この断念に基づいているということを述べている。断念した直後の沈黙を経験することで初めて生きる姿勢が明確に表れてくるともいう。つまり、断念は追い詰められた状況下で決定する最後の手段であるというよりも、むしろこれから生きていく上での出発点である。この真実から人間は真の自由を獲得する。彼はそう結論づけている。これはきわめて聖書的な考え方である。ヨハネによる福音書8章32節に「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」とあるが、まさに彼はそれを身をもって知る。それゆえ、彼は故郷やそこに安住する人々とも訣別し、一人で生きていくことができた。これは、こうした信仰から来る断念という姿勢が染み付いているからこそ可能であったのだ。まさに、彼にとって日本海とは、故郷とか安らぎなどと断念するために存在するものであった。ここには、「海をわたる」という発想はない。そこには、海にしずめる、海とともに永遠に沈められるのが詩であるという発想に彼は辿りつくのである。

僕らは誰に詩を書いているのだろうか。ひょっと、あらためてみんな顔を見合わせることもある。（中略）僕らの書いた詩が、そのままやすらかに沈んで行けるような、一種原始的な吸引力をもった「理解の海」、そういったものを僕は予感している。そういう海の深みへ、僕らの詩を一つ一つ

中 島 賢 介

沈めて行く衣ことが、つまりは、僕らの詩のかきかたといえはしないだろうか。

「ロシナンテ第5号あとがき」²¹

6 もう一つの海

これまで、「北にある海」とは「わたるべき海」であり、「南にある海」は「断念すべき海」であるということを書いてきた。彼自身が言及するように、その二つ海は彼の精神世界に確かに存在する。詩作品を見る限りにおいてもそれは明らかである。

だが、彼自身が述べなかった、いや言及しようとしなかった海がある。それが、故郷の海すなわち富士山が遠望できる駿河湾である。再び、「肉親にあてた手紙」を引用してみよう。

とに角、私は伊豆へ着くや否やいきなり絶望しました。伊豆にいる間、もう帰ろう、もう帰ろうと思いつながらそれでも予定の半分だけでも滞在したのは、おそらくは、十三年ぶりで見る故郷の山河や蒼穹のただずまいに強くひかれたからにはほかなりません。(中略)一つだけつけ加えるなら「もはや墓地とははっきり離れなければならない」という考えは、まさにその墓地を「うろついて」いる時に、私の内部ではっきりした輪郭をもって来たということです。 「肉親にあてた手紙」²²

絶望した事件は先述したが、彼の詩世界の中に、この伊豆という風光明媚な土地が登場しないわけがない。彼は人間関係に言い知れぬ絶望感、更には血縁という関係に意味を見出すことができなかった。だが、彼は二度と訪れることのないという極めて緊張感を集中力を持ってこの景色を眼に焼き付けていたのである。そのことは、他のどこの箇所にも同様の表現は見当らず、見落としそうな記述である。この伊豆での体験は、人間の生き方にとってはマイナスに働いたことは先ず間違いない。しかし、彼の詩人としての精神世界の構築にとっては、忘れることのできない貴重な体験であったのだ。なぜなら、北にある海一つをとってみても、事実としてそこにある海を見たわけではないので、詩人としての想像力はそれ以上には膨らまない。海は抽象的な意味としてのみ描かれるが、それが現実にもとづいたものではないゆえに表現にも限界がある。よりリアルに詩世界を充実させるには、この実際に日本における唯一の支えであった伊豆の風景は彼自身が意図せずとも、それを利用してはいえないだろうか。

落魄

女のみぎの肩をこえて／なおもおしだまる海があり／海のたわみへなだれるかに／かたむいた部落の／荒廃がある／杵ともみえる／一基の軸をめぐり／扉のように向きを／変えるとき／ひだりの肩を迎えるのは／またしてもしづかな／部落と海である／いくばくの日と／月が満ち／聳立した姿勢のまま／大地の光と影のなかへ／ひとりの男子を／生みおとすとき／朝はむざんに継承され／風はこうりょうと／母子像をかきならす／生涯をその戸口に佇ち／立ち退くことを／知らぬものよ／僧侶がかえりみぬ／影のように／落日の壁へおちぶれるとき／布施とはついに／はずかしめの謂れか²³

もう一つの海

帰郷・2

その町は訓練して／やさしくさせなければいけない／おれが還る町だから／一個の蜜柑をにぎれない／手のひらの巨きさだから／その町の巨きさを／巨きさというには／なおたりない小ささだから／その町は訓練して／踵をそろえなければ／いけない／そのさいごの踵のそのひだりへ／はじめての踵を／そろえるのだから²⁴

これらの作品に描かれる海や町は、果たして北極海であろうか、日本海であろうか。これらはそのどちらとも判別がつかない、いわば分類から漏れた作品群である。理想郷でもなければ、断念す海でもあるまい。これらに共通する特徴があるのだとすると、「語りかけの対象」としての海なのではないだろうか。遠くにあるけれど、作者には原風景として確かに大切に保持しつづけているもの、つまり、北極海という想像上の産物でもなく、国境の意味をなす日本海でもない、紛れもなく駿河湾や土肥の町がこれらの作品に描かれていると考えるのは無理だろうか。そうでなければ、ここに描かれている落日や蜜柑をどう説明すればよいのか。自分は大見栄を切って故郷には帰らないといった手前、率先して踵を揃えさせることなどできようもない。注釈にも記したが、石原は本能的に詩を信じていた。だからこそ、自分の思いのたけを詩として表現しようとした。そこに、全く帰省のショックが描かれない訳がない。

この海こそが、「もう一つの海」なのである。例え人間関係に絶望しても、故郷に対する憧憬はどうすることもできず、詩作品にまで登場させるほど強い思いがあったのだ。だが、それを直接言うこともできない。ゆえに、こうした中途半端な「語りかけ」になってしまったのではないだろうか。

結び

石原吉郎は、作家としてもクリスチャンとしても断言する人である印象が強い。集団を極端に嫌い、脆弱な信仰を一刀両断にする。だが、その実、毅然とした表現の裏にはそうした武装をしないと生きていけなかった弱さがあったのである。いつも、自分から集団に溶け込もうとしても関係に向こう側から断ち切られてしまい、自分も売り言葉に買い言葉でこちらから関係を断ち切りなおす行為を繰り返す。どうしても入りきれない自分に終生まで苦しめられる。この真の姿が「もう一つの海」を考察することで浮かび上がってくる。「肉親にあてた手紙」以降、伊豆に対する郷愁を詩に託すことでしかできなかった。今回の「もう一つの海」を探ることによって、本人さえ説明のつかなかった、少なくとも説明しようと思わなかった石原自身の原風景に迫ることができた。彼の作品を抑留体験に結びつけた読者によって、抑留体験だけしか語れない詩人のように思われがちだった石原吉郎。これからは、収容所体験詩人やキリスト教詩人といった側面だけではなく、本来の抒情詩人としての彼を評価してもよい時代がきたのではないだろうか。

注釈

- 1 詩集『足利』より引用
- 2 『石原吉郎全集』第3巻 p. 528
- 3 『一期一会の海』「〈体験〉そのものの体験」p. 33
- 4 3に同じ
- 5 この論拠に、『石原吉郎全集』第三巻に収録されている鮎川信夫との対談「生の体験と詩の体験と」に次のような箇所がある。
「収容所体験に最初にくっついてると思ったのは『サンチョ・パンサの帰郷』ですね。それからその次に『葬式列車』を書いたわけなんですけど、ところが、あれを書いているときには、自分では、シベリアのことを書いてると思わなかったんですよ。ですからしばらくの間、人がシベリアのこと書いたのと言うと、違う違うと言ってたんですがね、そうじゃないんだ、こういうイメージだけができたんだと……。自分でも分かんなかったね。」
なお、同じ箇所で、石原は詩を本能的に信じていたのではないかとも述懐している。
- 6 3に同じ「二つの海」p. 101
- 7 同上 p. 103
- 8 『断念の海』「海への思想」p. 73
- 9 同上 p. 75
- 13 『石原吉郎詩集』「肉親にあてた手紙」p. 129
- 14 同上p. 123
- 15 3に同じ「二つの海」p. 106～107
- 16 詩集『斧の思想』より引用
- 17 16と同じ
- 18 詩集『足利』より引用
- 19 詩集『サンチョ・パンサの帰郷』より引用
- 20 8と同じ「詩と信仰と断念と」pp. 99～100
- 21 2に同じp. 520
- 22 13に同じp. 130
- 23 詩集『水準原点』より引用
- 24 詩集『禮節』より引用

参考文献

- 『石原吉郎全集』全3巻 花神社 1979年～1980年（昭和54年～55年）
『石原吉郎詩集』現代詩文庫26 思潮社 1969年（昭和44年）
『続・石原吉郎詩集』現代詩文庫120 思潮社 1994年（平成6年）
石原吉郎著『断念の海から』日本基督教団出版局 1976年（昭和51年）
石原吉郎著『一期一会の海』日本基督教団出版局 1978年（昭和53年）
安西均編著『石原吉郎の詩の世界』教文館 1981年（昭和56年）
多田茂治著『石原吉郎「昭和」の旅』作品社 2000年（平成12年）
若槻泰雄著『シベリア捕虜収容所』世界人権問題叢書 明石書店 1999年（平成11年）